

在日中国人留学生の異文化適応に関する研究
—留学する直前のパーソナリティ・資源・適応の関連について—

孫 怡

お茶の水女子大学グローバル COE プログラム

「格差センシティブな人間発達科学の創成」

PROCEEDINGS 04 Grant-In-Aid Research Awards

(公募研究成果論文集 2007 年度第二集)

在日中国人留学生の異文化適応に関する研究 —留学する直前のパーソナリティ・資源・適応の関連について—

孫 怡

(人間発達科学専攻)

1983年に日本政府が発表した「10万人留学生計画」から、留学生数は増え続け、2006年に117,927人に達した(文部科学省、2007)。2008年には少子化対策の一環として“留学生を増やし2025年に留学生100万人”という目標も教育再生会議で取り上げられた。今後ますます日本社会にとって留学生の存在は大きなものとなることが予想される。留学生の異文化社会における適応は、ホスト国の社会的安定にかかわると同時に、その個人にとっても大きな人生の課題になる。

これまでの留学生に関する研究の中で、パーソナリティは重要な個人要因の一つとして、異文化適応との関連(e.g., 性格5因子と心理的適応との相関、Swagler 他、2005; Hardiness と心理的適応との相関、Ataca 他、2002)が多くの研究で扱われてきており、どのようなパーソナリティ特性が留学後の適応に影響するのかが検討されてきている。

しかし、そもそも留学という行動を選択する集団はどのようなパーソナリティの特徴を持っているのであろうか。留学は様々な困難が予想されるなかで異文化社会で一定期間生活していこうという挑戦的な体験であり、海外留学を決意する背景には共通のパーソナリティ特性が存在する可能性が考えられる。例えば、同じ異文化集団としての移民者に関する研究では、移民者は非移民者よりも仕事志向の高さや高い達成動機、高い権力への志向性を持つことなどが明らかにされている(Boneva 他、2001)。

現在、中国人留学生は在日留学生の約63%(文部科学省、2007)を占める大きな集団であり、経済上の不利要素による適応問題も多いため、中国人留学生の日本での適応をサポートすることは本人自身にとっても、また日本の教育現場にとっても重要な課題であろう。日本に留学してくる中国人留学生のパーソナリティの特徴と彼らの適応との関連性を明らかにすることはこうした留学生サポートにとって大きな意義を持つものであると考えられる。そこで本研究の研究1では中国人留学生を研究対象として、非留学生(中国にいる中国人大学生)と比較しながら、留学生の

パーソナリティの特徴を検討することにした。留学生グループでは、留学中の異文化環境によってパーソナリティが変化する可能性(Stitsworth、1989)も考えられるので、留学しようとする人(留学志向者)、1年未満(短期留学生)、1年以上(長期留学生)という留学期間を考慮した3群に分けて考察をおこなうことにした。

また、パーソナリティのような個人要因以外の環境要因も適応に対して極めて重要であるため、パーソナリティと環境資源の相互作用の視点から、留学生の適応を考察すると、より現実的な応用性があると考えられる。Hobfoll(1988)の資源理論は、人々は要求(Demand)に対応する資源(Resource)を十分に持っているときには適応が可能となり、逆に資源が無かったり不足したり、あるいは喪失する場合にはストレスなどが生じる、と論じている。家族や慣れた環境を離れて、言語や文化などが異なる国への留学はかなりの資源喪失と要求増加のリスクが伴うことであり、留学後の適応過程は資源の獲得と密接な関係があると考えられ、こうした資源理論の観点から異文化適応を考察する必要があると考えられる。従来の異文化適応研究では、パーソナリティと資源それぞれの適応への影響を検討したものが多かったが、その2つの相互作用を検討するものは少ない。

本研究の研究2では、今後申請者が展開する予定である一連の縦断研究の基礎として、まず留学する直前、すなわち資源喪失の直前とも言える段階におけるパーソナリティと資源と適応との関係について検討を行う。ここでの資源は、“要求を満たし問題を解決するためのあらゆるもの”という広義の定義(Hobfoll、1998)を採用し、個人自身が持っている有形(資産)と無形(知識や技能や経験など)資源と、外部から提供された有形(資産)と無形(情報・指導の提供や感情支持など)資源を含める。まもなく未知の世界に直面しなければならない状況に置かれた時点で人それぞれの資源意識と実際の事前資源追求を測定し、それとパーソナリティとの関連、また留学直前の心理状態への影響を考察しながら、パーソナリティ・資源・適応、その

3要素の相互作用を検討する。

研究1 留学生のパーソナリティの特徴

方法

調査対象

2007年3月と2008年3月の間に、中国上海の2つの4年制共学大学に在籍している学生200名と、東京の5つの日本語学校と3つの4年制大学（共学2校と女子大学1校）に在籍している中国人留学生200名の計400名に調査票を送って回答を依頼した。合計358名分を有効に回収した（回収率90%；男性126名、女性232名；年齢範囲は19-28歳、 $Mean=21.54$ 、 $SD=2.77$ ）。中国にいる学生には「留学してみたいと思っている」という質問に対する回答（はい・いいえ）によって、留学志向有り群（留学予備群）と留学志向なし群（非留学生）に分けた。留学生については「自分の意志で留学したのか」という質問で自分の意志ではなく留学した人を除外した後、在日期间によって、短期留学生群（1年未満）と長期留学生群（1年以上）に分けた。

パーソナリティの測定

Temperament and Character Inventory (TCI) (Cloninger 他、1993) 短縮版の中国語版（125項目）を使用した。“当てはまる”から“当てはまらない”の4件法で尋ねた。TCIの7次元は、4つの性格（新奇性追求、損害回避、報酬依存、固執）と3つの気質（自己志向、自

己超越、協調性）からなる。

結果

1. 留学志向の有無および在日年数別でのパーソナリティ特性の比較

留学予備群（まだ留学していない、留学志向のある人）を含めて、留学志向の有無と留学の年数によって調査対象をA)非留学生、B)留学予備群、C)短期留学生（1年未満）、D)長期留学生（一年以上）という4群に分けた。SPSS (12.0) の一元配置分析によって4群の得点を比較したところ、新奇性追求・固執・報酬依存・協調性に有意差が見られた。さらに、多重比較を行った結果（Table 1）、留学志向有りの人は留学志向無しの人より固執性が有意に高かった。また、新奇性追求と報酬依存においては短期留学生が長期留学生より有意に低く、協調性においては留学予備群が短期留学生より有意に高かった。

考察

留学志向の有無での比較の結果、留学志向者はより高い固執性を持っていることが示唆された。留学志向者には、すでに留学している人だけではなく、留学しようとしている人も含まれたため、留学生の留学する前のパーソナリティ特性も窺うことができた。それゆえ、彼らの共通性はまさに留学生の本来のパーソナリティ特徴とも言える。

固執の得点の高さについては、TCI性格・気質理論においてCloningerらが描写している固執特性の高得点者の特徴によると（1994）、留学生が勤勉でhard-working

Table 1 留学生と非留学生のTCIにおける得点の有意差

TCIの7次元	留学志向無し				留学志向有り				F
	A 非留学生 (N=104)		B 留学予備群 (N=72)		C 短期留学生 (N=140)		D 長期留学生 (N=42)		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
1 新奇性追求	48.43	7.67	48.82	6.74	46.16	7.67	49.60	6.69	3.82**
					a		b		
2 損害回避	47.58	8.48	46.11	8.21	45.98	9.84	45.90	9.63	n.s.
3 報酬依存	37.98	5.53	38.36	4.91	36.54	6.70	40.50	5.55	5.77***
					a		b		
4 固執	13.26	2.44	14.53	2.73	14.54	2.80	14.86	2.31	6.44***
	a		b		b		b		
5 自己志向	66.11	10.28	68.08	8.72	64.43	12.77	69.17	11.51	n.s.
6 自己超越	35.04	7.90	36.15	8.18	33.31	8.36	35.79	7.31	n.s.
7 協調性	74.19	8.50	78.15	9.17	72.05	12.96	76.45	9.23	5.28***
			a		b				

注：aとbの間には得点の有意差がある、** $p \leq .01$ ；*** $p \leq .001$

を好み、かつ野望と達成動機高く忍耐力強いといったような性格特徴を示すことが示唆されよう。それは Boneva ら (2001) の移民者が高い仕事志向性と高達成動機を持つという結果と一致している。先行研究 (Ataca 他、2002; Kuo 他、1986) によって、忍耐力 (hardiness) は心理的適応と関連して、留学適応に対するポジティブなパーソナリティ要因であるとみなされている。したがって、高い固執性は留学生のパーソナリティの特徴として異文化適応に対して有利な気質でもあるといえる。さらに、高い固執性は留学予備群と留学生の共通点として、現実的に留学しているか否かにかかわらず、それはすべての留学志向者が持つ特徴であると考えられる。

高い新奇性追求は、未知な世界へ行く主要なモチベーションと考えられる。長期留学生の新奇性追及得点は短期留学生よりも高く、なおいっそう強い好奇心を持っていることがより長期の滞日につながる可能性があるのではないだろうか。

協調性においては、短期留学生が留学予備群より有意に低かったことがわかった。それは留学後間もない時期においては留学する前よりある程度協調性が低下すると意味しているのではないか? TCI の協調性には、社会的受容、共感、他者への援助性と思いやり、統合的良心という5つの下位概念が含まれている。それらを不慣れな異文化のなかの新奇な他者に対して発揮することは来日初期の留学生にとっては能力以上のことであり、新しい環境の人々と触れ合う機会も少なくなりがちなことから、協調性得点の自己評価が低めに見積もられた可能性が考えられる。さらに、長期留学生と他のグループの間には、有意差がなかったため、新環境に慣れていくにつれて、留学生の協調性がまた戻ってきたと示唆しているのか、それは今後来日前からの縦断的な研究によって検討される必要がある。

また、長期留学生と短期留学生の間に報酬依存における得点の有意差が見られた。報酬依存の概念によると、得点の高い人は温かく感受性や社会的愛着が強く、他人の感情的サポートや報酬に依存する傾向が高いとされている (Cloninger 他、1994)。それらは一人で来日したばかりでソーシャルワークがまだできていない短期留学生にとっては期待し難い一方で、日本の文化においてはこうした他者に対する感受性や同調性は中国文化より強く強調されていると考えられるため、日本の異文化により馴れ染んだ長期在日の留学生は報酬依存が高くなったのではないかと推測される。この点についても上記の協調性と同様に縦断的研究によって変化のプロセスを検討する必要がある。

研究2 留学する直前のパーソナリティと資源、そして適応との関係

方法

調査対象

2008年4月に、交換留学生として来日する予定の中国人大学生/大学院生72名。

手続き

2008年3月、中国上海と大連の2つの大学/大学院に在籍している学生(145名)にネットを通じてWeb調査の依頼書を送り、日本へ留学する前の1週間間にWeb調査の質問を回答してもらった。合計72名分を有効に回収した(回収率50%;男性20名、女性52名;年齢範囲19-24歳、 $Mean=21$ 、 $SD=0.97$)。

尺度

1. パーソナリティの測定

TCI-125項目 (Cloninger 他、1993)、研究1と同じものである。

2. 資源意識

本研究のため作成された10項目からなる尺度を用いた。普段の生活中、新しい資源を求める・作る意識(例:“常に新しい技能を勉強するのが好きです”)や、環境に既存している資源を発見・追求・利用する意識(例:“何かやる時、いつも他人より周りに潜んでいる資源をよく見つける”)、無駄に見えるものを有用な資源に変える意識(例:“壊れたものを修理したり、古くなったものを改良したりして、有用なものにすることが好きです”)、足りない資源を補足する意識について(例:“目標に達成するのに必要なものが足りないとき、いつも有効な方法・ルーツを探して足りない分を補う”)、“当てはまらない”から“当てはまる”の4件法で評定を求めた。10項目を合計し、“資源意識”得点とした。

3. 資源追求

資源追求は、準留学生が、事前に留学先の状況に対して、どれくらい調べたか実際の資源追求行動について、設けた質問である。日本社会の文化、法律、医療、生活施設、学校環境、アルバイト、留学生ための支援組織という7つの領域から、それに関する情報を調べたことのある領域を選んで、1点とする。また、自由記述のところ、調べた他領域があればすべてを記入してもらい、提示した7つの領域と重複しない場合、1領域を1点とする。得点を合計し、実際の資源追求の行動力を示す。

4. リスク感知

本研究のため作られた、留学直前の時点で、将来の留学の過程で発生するかもしれないリスク(困難・災害・ストレスなど)に対する感知度を測る尺度を用いた。生活、

学習、アルバイト、感情、意外災害という5つの側面からのリスクを含め、全部で18項目からなる(例:“現在あなたは、将来の留学の過程で生じるかもしれない、言語の不自由による生活上の困難を心配しているか”)。“まったく心配していない”から“非常に心配している”の4件法で測定し、合計得点が高いほど、リスク感知度が高いこととなる。

5. 自己効力感

Schwarzerによる一般性自己効力感 (General Self-Efficacy Scale, GSES) 10項目の中国語版(王他, 2000)を使用した(例:“何かあっても、私はうまく対応することができる”)。“当てはまらない”から“当てはまる”の4件法で評定を求め、算出した合計得点が高いほど、一般性自己効力感が高いことを示す。

6. 不安

Spielberger (1970)による状態-特性不安検査 (State-Trait Anxiety Inventory) の状態不安の中国語版 (20項目) を言語的に修正したうえで使用した(例:“この1週間の中に、緊張感がある”)。“ほとんど感じていない”から“よく感じている”の4件法で評定を求めた。20項目の得点を合計し、“不安”得点とした。得点が高いほど、不安が強く適応状態が悪いこととなる。

結果

1. パーソナリティ特性・資源要因・適応要因間におけるそれぞれの相関関係

パーソナリティ特性と資源(資源意識・資源追求)との関連、およびそれらの留学する直前の心理状態(リスク感知・自己効力感・不安)に対する影響を検討するため、TCIと各尺度との相関関係をSPSS (12.0)で算出した。相関分析の結果 (Table 2)によって、損害回避 (HA)・新奇性追求 (NS) という2つの気質・性格が資源要因(資源意識・資源追求)との間に有意な相関がみられ、パーソナリティ特性の資源への強い影響が検証された。また、損害回避 (HA)・自己志向 (SD) と適応要因 (自己効力

感・リスク感知・不安)、資源要因と適応要因との間に、それぞれの有意な相関も検証され、パーソナリティおよび資源要因両方から心理的適応への予測が示された。資源意識と資源追求との間には、有意な相関がみられなかった。

2. パーソナリティ・資源・適応の3要素の相互関連モデル

TCIの7次元と各尺度との間にそれぞれ検証された相関関係に基づき、損害回避と新奇性追求という2つの気質が資源要因および適応要因とも関係していたため、それらを取り上げ、それぞれのパーソナリティ特性と資源要因と適応要因との相互関連モデルを作った (図1、図2)。矢印線は有意な相関を表し、“+”は正の相関、“-”は負の相関を示す。

考察

1. パーソナリティの影響の検討

損害回避 (HA) は資源意識・資源追求の間に有意な負の相関がみられ、HAが高いほど、資源意識と実際の資源追求両方とも低くなり、リスク感知度と不安が高いことがわかった。それに対し、新規性追求 (NS) の高い人は、資源意識が高く、自己効力感も高くなる傾向があると見られた。また、自己志向 (SD) は資源要因との相関は見られなかったが、リスク感知と不安とは強い相関が持ち、直接に心理的適応の状態に影響を及ぼしていると考えられる。

2. 資源の心理的適応への影響

資源意識は、リスク感知と不安との有意な相関がみられなかったが、資源追求はリスク感知とも不安とも強く負の相関があった。それによって、資源意識よりも、実際の行動力がもっと直接に適応に影響を与えるのではないか。資源追求により得られた留学先の情報が多ければ多いほど、リスクに対する懸念が少なくなり、不安も低下することが考えられる。

しかし、資源意識と自己効力感との間には、高い正の相関があった。つまり、資源意識が高い人は自己効力感も高い傾向がある。よって、資源意識が自己効力感を媒介して、

Table 2 パーソナリティ・資源意識・資源追求・リスク感知・自己効力感・不安の相関関係 (N=72)

パーソナリティ	資源意識	資源追求	自己効力感	リスク感知	不安
損害回避	-.37*	-.35*		.36*	.37*
自己志向				.38*	.45**
新奇性追求	.49**		.57**		
自己効力感	.54**	.33*		-.46**	-.39*
リスク感知		-.42**			
不安		-.48**		.75**	

* $p < .05$; ** $p < .01$

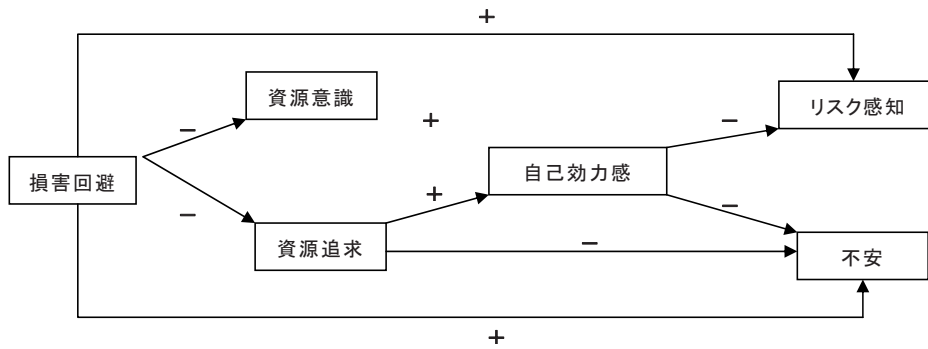


図1 損害回避・資源・適応の関連モデル

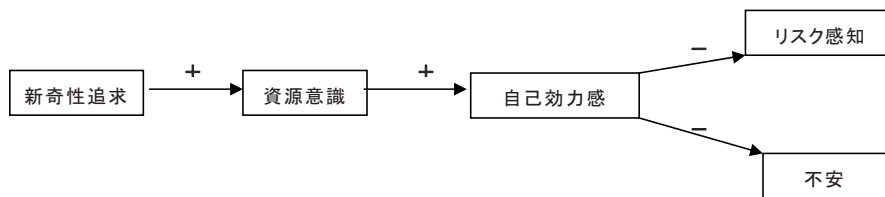


図2 新奇性追求・資源・適応の関連モデル

不安に影響を及ぼすといった間接的な関連があると考えられる。

3. パーソナリティ・資源・適応の関連

損害回避・資源・適応の関連モデル（図1）によって、損害回避は直接適応要因に影響する一方、資源要因を媒介してまた間接的な影響を与える可能性もある。例えば、損害回避が低い場合、資源意識が高く、周りの資源を積極的に求める。そして、必要な資源が多ければ多いほど、自己効力感を高め、リスク感知・不安を低下すると考えられる。

新奇性追求・資源・適応の関連モデル（図2）によって、新奇性追求は、損害回避のように直接に適応を予測しないが、資源意識を媒介し、自己効力感やリスク感知、不安に影響を与えることは考えられる。

総合考察

研究1で、先行研究において孫（2006）が検証した異文化下での心理的適応の良好さ（精神的健康）と正の相関を持っていた自己志向および負の相関がみられた損害回避という2つのパーソナリティ特性は対象群の間に有意差が見られなかった。すなわち精神的健康と有意に関わる要因である自己志向と損害回避（松浦他、2008）においては、留学志向群において優位性があるわけではないことが明らかになった。言い換えれば、留学しようという決意があっても、留学志向性のない学生たちよりも精神的健康に対してレジリエントな性格特性を強く持っているわけではなく、実際の留學生活においては心理的適応に問題を抱える学生も少なからず存在する可能性があることになろう。自己志向性（自己責任や目的性、自己効力感の強さなど）や損害

回避（予期不安の強さや易疲労性、抑うつ傾向など）といった異文化適応に影響する重要な性格要素を参考にして、留學生自身が自分の特徴や能力などをしっかり把握した上で留學生活を送ることが必要であり、またこれらを考慮したうえでの異文化適応に関するサポートも有効であると思われる。

しかし、研究2で、損害回避と自己志向、この2つのパーソナリティ特性は留學する直前の心理的適応にも影響があったことがわかった。それは先行研究の結果と一致し、留學する前から留學過程中的の適応にかかわるパーソナリティ要因を検証した。

さらに、研究2ではHobfollの資源理論を取り込み、人間と資源との相互作用を考察し、人々の環境利用の能動性に影響するパーソナリティ要因（損害回避・新奇性追求）を明らかにした。先行研究によって、要求に応じる資源を多く持っていれば持つほど、ストレスが生じる可能性が低く、適応状態がよいと論じられている（Hobfoll他、2003）。ある資源の有無または資源の量はある程度で外部の環境に制限されているが、個人要素も非常に重要な決定因の一つであるので、本研究では、単なる資源による適応への影響ではなく、資源の開発・追求・利用に関する意識と実際の資源を求める行動力を通して、人間の資源に対する能動性を考察し、それとパーソナリティと適応との相互作用を検討した。

以上より、本研究では留學生のパーソナリティ特徴や留學する直前のパーソナリティ・資源・適応の相互作用について、興味深い結果が得られたが、限界性の1つとして、調査対象者（特に、長期留學生と留學する直前の人）の人

数の少なさがあげられる。今後は人数を増やして滞在期間の長短の効果をより詳細に検討していきたいと思う。また、本文中に述べたように、本研究は横断的な検討であり、今後、実際の異文化適応過程におけるパーソナリティの変化に関する縦断的な追跡調査の実施が求められよう。

(文献)

Ataca, B. & Berry, J. W. (2002). Psychological, sociocultural, and marital adaptation of Turkish immigrant couples in Canada. *International Journal of Psychology*, Feb 2002, Vol. 37 Issue 1, 13-26.

Boneva, B. S. & Frieze, I. H. (2001). Toward a Concept of a Migrant Personality. *Journal of Social Issues*, Fall 2001, Vol. 57 Issue 3, 477-491.

Hobfoll, S. E., Johnson, R. J., Ennis, N., & Jackson, A. P. *Journal of Personality & Social Psychology*, 2003, Vol. 84 (3), 632-643.

Kuo, W. H. & Tsai, Y. M. (1986). Social Networking, Hardiness and Immigrant's Mental Health. *Journal of Health & Social Behavior*, Jun 86, Vol. 27 Issue 2, 133-149.

王才康、刘勇 (2000). 匯達徠厘井孀湖嚙蒙嶠醜打、彝蓑醜打才深編醜打議ヲ購寫梢 嶄忽匠寬仇尖僥墩崗 2000 年第 4 期, 229-230.

松浦素子、菅原ますみ、酒井 厚、眞榮城和美、田中麻未、天羽幸子、詫摩武俊 (2008). 成人期女性のワーク・ファミリー・コンフリクトと精神的健康との関連——パーソナリティの調節効果の観点から パーソナリティ研究 第 16 巻 第 2 号, 149-158.

Stitsworth, M. H. (1989). Personality Changes Associated With a Sojourn in Japan. *Journal of Social Psychology*, Apr 89, Vol. 129 Issue 2, 213-224.

Swagler, M. A. & Jome, L. M. (2005). The Effects of Personality and Acculturation on the Adjustment of North American Sojourners in Taiwan. *Journal of Counseling Psychology*, Oct 2005, Vol. 52 Issue 4, 527-536.

孫 い (2006). Personality, Acculturation Attitude and Psychological Adaptation. お茶の水女子大学大学院修士論文 (未公刊)

Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushene, R. F. (1970). Manual for the state-trait anxiety inventory, Palo Alto CA: Consulting Psychologists Press.

Acculturation Adaptation of Chinese Students in Japan: Association of Personality, Resource and Adaptation during the Last Week before Going Abroad to Study

Yi SUN

(Human Developmental Sciences)

The study explored the personality features of Chinese students studying in Japan, and the correlation between personality, resource and psychological adaptation. Study 1 examined the personality of 358 Chinese students (aged 19-28 years) both in Japan and in China, using the Temperament and Character Inventory (TCI, Cloninger, 1993). The TCI involves Novelty Seeking (NS), Harm Avoidance (HA), Reward Dependence (RD), Persistence (P), Self Directedness (SD), Cooperativeness (C), and Self Transcendence (ST). The comparison was conducted between 4 groups: a) Chinese students in China without Studying Abroad Orientation (SAO); b) Chinese students in China with SAO; c) Chinese students staying in Japan less than 1 year; d) Chinese students staying in Japan more than 1 year. The analysis result of t-Test for SPSS 12.0 showed significant differences between the four groups, that were Novelty Seeking, Persistence, Cooperativeness and Reward Dependence. Furthermore, the multiple comparison (Post-hoc test) between each two of the four groups implicated that the longer Chinese students stayed in Japan, the NS and RD of them were higher than others, especially significantly higher than those Chinese students who were studying in Japan but had stayed in Japan for no more than 1 year. Meanwhile, all of the students with SAO showed significantly higher Persistence than those without SAO. However, the Cooperativeness of Chinese students in China with SAO was higher than the others, especially higher than those studying in Japan with less than 1 year, significantly. Study 2 examined the psychological states (Personality, Resource Awareness, Resource Seeking, Self-Efficacy, Risk Perception, and State Anxiety) of 72 Chinese students during the last week before they were going to Japan for studying. The significant correlations between most of the variables suggested a model of the relationship of personality, resource and adaptation. First, the characters of HA and NS had significant effect on Resource Awareness. Then, Resource Awareness had positive effect on Self-Efficacy. Finally, Self-Efficacy predicted both Risk Perception and Anxiety. The explanations of these results and the implication for acculturation adaptation were discussed.

Keywords: Personality Feature, Resource, Acculturation Adaptation, Self-Efficacy, Risk Perception